

The verbal suffix -gaa in Haida

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堀, 博文 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00026418

ハイダ語の動詞接尾辞 *-gaa*について

堀 博 文

キーワード：ハイダ語，形態法，状態化，活格言語

1. 序

ハイダ語¹にはヴォイス（態）に関わる要素の一つとして *-gaa* という接尾辞²がある（以下、グロスでは GAA と示す）。例えば、(1a) では *kiw ‘tie’* という動詞が 2 つの名詞句 *tl'ə= ‘they’*（主語）と *tləwaay ‘the boats’*（目的語）をとっているのに対し、問題となる接尾辞 *-gaa* が付いた (1b) ではそれらの名詞句のうち、もとの文の主語 *tl'ə=* が削除され、同じく目的語であった *tləwaay ‘the boat’* が主語の位置に現われている³。

- (1) a. tləwaay gud=gi tl'ə=kiw-gən.
the.boat each.other=to they=tie-PST
'They tied the boats together.'
- b. tləwaay gud=gi kyaaw-**gaa**-gən.
the.boat each.other=to tie-GAA-PST
'The boats had been tied together.'

¹ ハイダ語 Haida は、アメリカ合衆国アラスカ州南東部とカナダのブリティッシュ・コロンビア州北西海岸部のハイダ・グワイ Haida Gwaii (クイーン・シャーロット諸島) で話される系統不明の言語である。ここで示すデータは、ハイダ・グワイのスキドゲイト Skidegate で話される方言のそれである。

² この接尾辞には、異形態として *-aa*～*-yaa* という形式がある。また、それが付く動詞語根に形態音韻的な変容をもたらすことがある（例えば、(1) の *kiw* から *kyaw* への交替など）。

³ ハイダ語は、おおよそにおいて形態音韻的規則が単純なので、音素表記に形態素境界を入れて示すことにする（形態音韻規則によって形態素の境界が分明でない場合は、グロスにおいてそれらの形態素の意味を [] に入れて示す）。出典が明示されているものを除き、本稿のハイダ語例は、筆者が直接的にあるいは間接的に得たものである。グロスで用いられている略号の一覧は末尾にある通りである。

以下ではこの接尾辞を *-gaa*①（あるいは単に①）と称することにする。

一方、この *-gaa*①と同じ形式で、名詞に付いて動詞を派生する接尾辞がある（同じくグロスでは GAA と示す）。

- (2) 'laa='uu lk'ingid-**aa**-gən.

3=FOC orphan-GAA-PST

'He/she was an orphan.'

(2) では、名詞 *lk'ingid* ‘orphan’ に接尾辞 *-gaa* が付き、「孤児である」という動詞を派生している。以下では、この接尾辞を *-gaa*②（あるいは単に②）と称することにする。

これらの 2 つの接尾辞について、Enrico (2005) は①を Haspelmath (1993) のいう participle に機能的に近いとして participle suffix、一方、②を stative suffix として区別している⁴。

エンリコがそれらの接尾辞を区別するその根拠は十分明らかではないが、しかし、これら 2 つの接尾辞は、少なくとも形態（音韻）的なふるまいの面において、いずれも異形態 (*-gaa* ~ *-aa* ~ *-yaa*) が同じであり、かつ、その現われる条件がほぼ一致しているという共通する特徴がある。更に、これらの接尾辞は、音声的には [gá:] ではなく、（異形態に応じて） [gá ~ á ~ yá] のように短母音で、かつ、高声調を担う点も共通する。ハイダ語の声調は、音声的には ['] (高), [unmarked] (中), [`] (低) の三段階があり、そのいずれが現われるかは、音節のライムの構造から大体予測することができる（詳細は堀 2001 を参照）。そのうち /VV/ をライムにもつ音節は、[V:] のように長母音で実現し、かつ、高声調を担うことが予測されるが、これらの接尾辞（音素表示ではいずれも /gaa/) は、音声的には高声調を担うものの、短母音で実現するといった、音声的な実現が特異である点も共通する。

こうした形態（音韻）的に共通する特徴に加え、これらの接尾辞で派生された動詞は自動詞であり、かつ、その主語が人称代名詞の場合、その目的格 objective [OBJ] が現われるという点も両者に共通する特徴として指摘できる。

本稿では、まず *-gaa*①と *-gaa*②の機能を明らかにした上で、*-gaa*①と *-gaa*②はいずれも「状態化」を主たる機能とする接尾辞であり、前者が「出来事（コト）の状態化」、後者が「事物（モノ）の状態化」を表わすという解釈を示す。

⁴ Enrico (2003) では①を middle suffix と称している。

2. ハイダ語の動詞の項構造

まず、*-gaa*①がどのような動詞を派生するのかをみる前に、本節では、ハイダ語に現われる、1項動詞、2項動詞の種類について簡単にまとめておく⁵。

2.1 1項動詞

1項動詞では、その唯一の名詞項 ((3) では X と表わす) が主語となる。1項動詞は、その主語となる名詞句の指示対象が有生物 animate か無生物 inanimate かによって、次のように分類される。

(3) 1項動詞 (名詞項= X)

	animacy	X	動詞の例
(a)	animate	Sa	<i>naaj</i> ‘play,’ <i>k’ah</i> ‘laugh,’ <i>xyaal</i> ‘dance,’ <i>k’ajuu</i> ‘sing,’ <i>scaylə</i> ‘cry,’ etc.
(b)	animate	So	<i>k’uyig</i> ‘dress up,’ <i>k’udʔul</i> ‘die,’ <i>qaya</i> ‘be sleepy,’ <i>χaynajaa</i> ‘be alive,’ etc.
(c)	inanimate	S	<i>q’amal</i> ‘crack,’ <i>q’alʔud</i> ‘be moldy,’ <i>sgəw</i> ‘melt,’ <i>qal</i> ‘freeze,’ etc.
(d)	animate/ inanimate	Sa	<i>gyaagan</i> ‘stand,’ <i>q’əw</i> ‘sit,’ CL- <i>gudi</i> ‘a classifier-type object lie,’ <i>gay</i> ‘float,’ etc.
(e)	animate/ inanimate	So	<i>gəw</i> ‘be gone,’ CL- <i>guy</i> ‘fall,’ <i>galjigusdlə</i> ‘get hurt,’ <i>ŋaysdlə</i> ‘be cured,’ <i>cah</i> ‘sink,’ etc.

上の表において、(c) を除く 4 つの動詞は、その主語に有生物を表わす名詞をとることができるものである。それらの動詞は、その主語が 1 人称代名詞あるいは 2 人称単数代名詞である場合、動作格 agentive (AG) のそれをとるもの (上の表で Sa とした (a) と (d)) と目的格 objective (OBJ) のそれをとるもの (上の表で So とした (b) と (e)) に分かれる⁶。前者は、他動詞主語のそれ、後者は、他動詞目的語のそれと同じ格である。Sa の動詞は主語が自らその出来事を引き起こし、制御できることを表わす (すなわち [+agency, +control]) のに対し、So の動詞はそのような意味をもたない (すなわち [-agency, -control]) と特徴付け

⁵ ハイダ語には、主語となる名詞句が現われない 0 項動詞 (例 : *kun* ‘(whale) drift ashore,’ *hiiləy* ‘thunder,’ *dala* ‘rain,’ *cixi* ‘drip’ など) の他、3 項動詞もある。0 項動詞にはこれらの接尾辞が付くこともある (後述参照)。また、3 項動詞は、基本的に 2 項動詞に手段接頭辞や使役接辞など項を増やす接辞によって拡張されたものが多い。

⁶ 名詞にはこのような格の区別はない。

られる (Hori 2008) ⁷。

2.2 2項動詞

一方, X と Y という 2 つの名詞項をとる 2 項動詞は, Y すなわち目的語 (O) の標識によって, 大きく次の 6 つの類に分けられる。

(4) 2 項動詞 (名詞項=X, Y)

	X	Y	動詞の例
(a)	A	O	<i>gijigiida</i> ‘catch,’ <i>qij</i> ‘see,’ <i>tgigu</i> ‘bury,’ <i>taa</i> ‘eat,’ etc.
(b)	A	O=gii	INSTR-CL- <i>lə</i> ‘break sth into classifier-type pieces with an instrument,’ INSTR-CL- <i>nənəŋ</i> ‘cut sth into classifier-type pieces with an instrument,’ etc.
(c)	A	O=gi	<i>χaw</i> ‘fish,’ <i>dayiŋ</i> ‘look for,’ etc.
(d)	A	O=?ad	<i>gyaadah</i> ‘sell’, <i>kyaanəŋ</i> ‘ask,’ etc.
(e)	A	O=ga	<i>q'aluu</i> ‘pity,’ <i>k'uugaa</i> ‘love,’ etc.
(f)	A	O=gan	<i>?unsid</i> ‘know,’ <i>yahgudəŋ</i> ‘respect,’ <i>st'iχagəŋ</i> ‘be angry at,’ <i>gaxilda</i> ‘fight,’ etc.

(A : 主語, O : 目的語)

A となる名詞句には標識が一切つかず, 動作格と目的格の区別のある 1 人称と 2 人称単数の代名詞の場合は, 動作格が用いられる⁸。一方, O をみると, (a) を除く動詞の目的語の標識にはいくつかあり, どの標識をとるかは, 動詞ごとに決まっている。それらの標識は, 本来, 位置 (=gii ‘into,’ =gi ‘to,’ =ga ‘in’), 随伴 (=?ad ‘with’), 受益 (=gan ‘for’) を表わすために用いられるが, 以下, グロスでは, 本来の意味と区別するために, 目的語の標識として用いられている場合は, スモールキャピタルで示すことにする (例 : =gii ‘INTO’ など)。

3. -gaa①による派生動詞

本節では, -gaa①がどのような動詞を派生するのか, また, 付加され得る動詞と付加され得ない動詞の違いは何かなどを考察することにより, -gaa①の機

⁷ ハイダ語には, いわゆる「形容詞」という語類はなく, 形容詞的な概念は, ここでいう So 動詞が担う。

⁸ 但し, 主語に目的格の人称代名詞が現われる動詞がある (例 : *gud'laa* ‘like,’ *k'uugaa* ‘love,’ *?unsid* ‘know’ など)。

能を明らかにする。

3.1 2項動詞の場合

2項動詞に *-gaa*①が付加された例には、次のようなものがある（それぞれ a がもとの動詞、 b が *-gaa*①による派生動詞である。(1) も参照）。

- (5) a. dii='uu tl'ə=gijigiilda-gən.
1SG.OBJ=FOC they=catch-GAA-PST
'They caught me.'
- b. dii='uu gjijigiildaa-yaa-gən.
1SG.OBJ=FOC catch-GAA-PST
'I had beten caught.'
- (6) a. ?əsii lca=giisda tl'ə=tləgulga-gən.
this stone=out.of they=make-PST
'They made this out of stone.'
- b. ?əsii lca=giisda tləgulcaa-yaa-ga.
this stone=out.of make-GAA-NPST
'This is made of stone.'

これらの例の動詞は、いずれも (4a) の動詞、すなわち、目的語に標識が付かないタイプのものである。これらの例、また、他の2項動詞から派生した動詞の例において共通するのは、もとの2項動詞が要求する2つの名詞項(AとO)のうち、*-gaa*①による派生動詞においてはもとのA((5) ではいずれも *tl'ə*=‘they’)が削除され、1項動詞になっている点である。この削除されたAは、派生動詞の項となって現われることができない点において、この接尾辞によってできる構文は、典型的な受動態(あるいは受身)構文とは異なる。少なくとも、この *-gaa*①が付加されることによって、統語的には動作者が削除され、更に、(5b)においてその主語となる人称代名詞に目的格 *dii* が現われていることから、意味的には (3) の So タイプの動詞、すなわち、[-agency, -control] という意味特徴を有する動詞が派生されると基本的に考えられる。

次の例に示すように、もとの動詞の目的語は、派生動詞の主語（S）として現われるが、その標識は替わらず、もとのままである（以下、[] 内にもとの動詞の項構造を示す）。

- (7) *cudlcagaaj?waay=gii caad-laa-yaa-gən.*
the.chair=INTO by.moving-BREAK⁹-GAA-PST
'The chair had been broken.' [NP_[A] NP=gii_[O] caad-lə 'NP_[A] break NP_[O]']

もとの動詞 *caad-lə* 'break (something by moving)'（上掲 (4b) タイプの動詞）であり、=gii で標示されている目的語 *cudlcagaaj?waay* 'the chair' は、派生動詞において主語の位置に現われても、その標識がそのまま用いられている。次の例も同様である。

- (8) *tləwaay=?ad gyaadah-gaa-gən-ii.*
the.boat=WITH sell-GAA-PST-INFO
'The boat had been sold.' [NP_[A] NP=?ad_[O] gyaadah 'NP_[A] sell NP_[O]']

この例のもとの動詞 *gyaadah* 'sell' は、*dah* 'buy'（目的語の標識を伴わない (4a) タイプの動詞）に自動詞化接頭辞 *gyaa-* が付加されてできた動詞であるが、この動詞においては、自動詞化接頭辞の付加によって削除されるべき目的語が削除されず、むしろ「斜格」の =?ad 'WITH' が目的語の標識となる。その動詞に -gaa①が付加され、もとの目的語 *tləwaay* 'the boat' が主語の位置に現われても、標識はやはりそのままである。すなわち、-gaa①が付加されても、もとの主語（A）が削除されるだけで、目的語（O）にあった標識はそのまま保持されて派生動詞の主語となっている。このように格標識の交替が見られない点において、やはり受動態（あるいはそれと関連する現象）とは異なることが見て取れる。

この -gaa①はすべての 2 項動詞に付加されるわけではなく、付加され得る主な動詞をあげれば、次のようにある。

⁹ グロスにおいてスマールキャビタルで意味が付された語根は、手段接頭辞（INSTR）と類別接頭辞（CL）の両方あるいはいずれか一方を必ず要求する拘束語根である。

(9) -gaa①が付加される動詞

dlən ‘wash,’ *k'udlən* ‘paint,’ *q'aalay* ‘write,’ *tləgulgə* ‘make, fix,’ INSTR-CL-*lə* ‘break,’ CL-*c'id* ‘wrap (a classifier-type object),’ *?iigaw* ‘put sth on floor,’ *gagilə* ‘roof,’ *gijigiitlə* ‘catch,’ *tgicu* ‘bury,’ *sgal* ‘hide’ など。

これらの動詞は、いずれも、その対象に何らかの変化を加えるような行為を表わすことから、-gaa①が付加されてできた派生動詞は、その行為によってもたらされた結果の状態 resultative (Kittilä 2011: 360) を表わしているといえる。-gaa①による派生動詞が結果状態を表わすことは、次の例における類別接頭辞(CL) *k'əm-* が指示する内容からも窺える。すなわち、

(10) *tgaagaay=gii k'əm-laa-yaa-gən.*

the.stone=INTO CL-BREAK-GAA-PST

‘The stone crumbled.’ [NP_[A] NP=gii_[O] INSTR-CL-*lə* ‘NP_[A] break NP_[O]’]

類別接頭辞は、自動詞文の主語あるいは他動詞文の目的語となる名詞句がどのような意味範疇（主に形状や大きさ、機能など）に属するかを示すのが典型的な機能である（類別接頭辞の詳細については堀 2017 を参照）。従って、本来であれば、この文の主語である *tgaagaay* ‘the stone’ に対しては、その「石」の形状にあわせて丸い物体の範疇に属することを示す *skaa-* や平たい物体の範疇に属することを示す *gu-* といった類別接頭辞が用いられるところである。それに対し、この例において用いられている *k'əm-* という類別接頭辞は、粉々になつた状態の物体を表わす。すなわち、この場合、*lə* (壊したり潰したりする行為を表わす拘束語根であり、手段接頭辞か類別接頭辞のいずれかを要求する¹⁰) によって表わされた行為を「石」が受けた結果、その「石」が粉々の状態になつていることを表わしている¹¹。

(9) にあげた動詞は、その対象に何らかの変化を加えることを含意するが、次にあげる動詞のように、目的語となる対象物に何らかの変化を加えることを含意しない動詞には、-gaa①は付加されない¹²。

¹⁰ (10)においては -gaa①が付加されたことにより、*laa* という異形態が現われている。

¹¹ いまでもなく、(10)においては、「石」に対する本来の類別接頭辞を用いることはできない。

¹² (11) のいくつかの動詞の統語的な特徴として、目的語として再帰代名詞 *?əgəŋ* ‘oneself’ をとることができない点があげられる（すなわち、**?əgəŋ qaqan* (oneself meet) ‘meet oneself’, **?əgəŋ daw* (oneself invite) ‘invite oneself’ など）。2 項動詞に -gaa①が付加された際に生じる統語現象は、い

- (11) *qaqan* ‘meet,’ *daw* ‘invite,’ *c'aa?**antəŋ* ‘ask sb to company,’ *gindajij* ‘ask questions,’ *dayij* ‘look for,’ *squid* ‘punch,’ *sdasgid* ‘kick’ など。

更に、この *-gaa*①による派生動詞の主語がその行為を受ける本来的な能力を有することを表わすことがある。

- (12) a. gəm scidgaŋxalaay taa-**gaa-gəŋ-ga**.
 NEG the.wild.rose eat-GAA-NEG-NPST
 ‘The wild rose is not edible.’ [NP_[A] NP_[O] taa ‘NP_[A] eat NP_[O]’]
 b. gandlaay xutl'aa-**yaa-ga**.
 the.water drink-GAA-NPST
 ‘The water is drinkable.’ [NP_[A] NP_[O] xutl'ə ‘NP_[A] drink NP_[O]’]

これらの例は、potential passive (Haspelmath 1990) あるいは facilitative (Kemmer 1993) といわれるものに相当し、その主語（この場合はそれぞれ *sgidgaŋxalaay* ‘the wild rose,’ *gandlaay* ‘the water’）がその行為（それぞれ *taa* ‘eat,’ *xutl'ə* ‘drink’）を受ける、その内在的な性質を表わしているといえる。

(9) にあげたのは、対象に変化を与えることを含意する点において、いわゆる他動性が高い動詞であるが、*-gaa*①は、それよりも他動性の低い動詞にも付加されることがある。例えば、次の(13)のように、*-gaa*①は、他動性が低い、感情を表わす動詞にも付加され得る。

- (13) a. ?iid=gá q'aļjuw-**aa**=gyaan=huu ...
 1PL.OBJ=TO pity-GAA=when=FOC
 ‘When we were pitiful, ...’ [NP_[A] NP_[O]=cá q'aļjuu ‘NP_[A] pity NP_[O]’]
 b. gina ḡaynajanaa ?waa=dłəw=ḡan=gan yahgudəŋ-**aa-ga**.
 INDF be.alive all=FOR respect-GAA-NPST
 ‘All living things are respected.’
 [NP_[A] NP_[O]=gan yahgudəŋ ‘NP_[A] respect NP_[O]’]

わゆる逆使役 anticausative (Haspelmath 1990, Nichols et al. 2004, Kittilä 2011 など参照) と通ずるところがあるが、Haspelmath (1990) は、通時に再帰構文から逆使役構文へと至る文法化の可能性を指摘しており、もしそうであるとするならば、再帰構文にできない動詞に *-gaa*①が付加され得ないのも、そうした可能性を反映していると見做せるのかもしれない。尚、Geniušienė (1987) も参照。

これらの感情を表わす動詞の場合, *-gaa*①が付加されることによって, もとの動詞において目的語 (O) であった, その感情が向けられる対象 (あるいは, そのような感情を誘発する対象) が主語 (S) の位置に現われ, もとの動詞の主語 (A) であった, その感情の経験者は削除される。もとの目的語の標識 =*ga* ‘TO’, =*gan* ‘FOR’ がそのまま保持されているのは, これまで見てきた例と同様である。

(14) は知覚を表わす動詞に *-gaa*①が付加された例である。

- (14) a. dəŋca naagaay ?əsii=sda qyaan-gaa-ləŋaa-ga.
 your the.house this=from see-GAA-possible-NPST
 ‘Your house can be seen from here.’ [NP_[A] NP_[O] qinj ‘NP_[A] see NP_[O]’]
 b. ’lə=kil=’uu ?əsii=sda gudəŋ-aa-gən.
 3=voice=FOC this=from hear-GAA-PST
 ‘His/her voice was audible from here.’
 [NP_[A] NP_[O] gudəŋ ‘NP_[A] hear NP_[O]’]
 c. nəŋ gəm gan ?unsid-aa-gəŋ ...
 INDF NEG for know-GAA-NEG
 ‘Someone that was unknown ...’
 [NP_[A] NP=gan_[O] ?unsid ‘NP_[A] know NP_[O]’]

いずれも *-gaa*①が付加されたことにより, これら 2 項動詞の主語 (A) となる経験者が削除されており, その知覚の対象が主語 (S) として現われている。これは, 主語に現われる名詞句の意味役割からみて, 先にみた potential passive (あるいは facilitative) と同種のものであるといえよう。

以上をまとめると, 2 項動詞に *-gaa*①が付加されることにより, 統語的にはもとの動詞にあった主語が削除され, 行為や感情あるいは知覚の対象を主語にする構文が派生される。その結果できる構文では, その派生動詞がとりうる名詞項の数が 1 つ減るので, その点でいえば, やはりヴォイスに関わる統語現象の一種とみることができる。一方, 意味的には, その出来事を受けた結果の状態, 主語となる名詞句の内在的な性質, 更には, 主語が誘発者となる感情を表わす。いずれももとの動詞においてその出来事に積極的に関与する主体が削除され, もとの動詞において自ら関与していないその対象が主語として現われている。つまり,とりわけ対象に対する働きかけとその変化の結果を含意する 2

項動詞において、-gaa①によってその働きかけの担い手（出来事の起こし手）が削除された結果、出来事のうち、働きかけに関わる部分よりもその結果の方に焦点が当てられた表現になったと考えられる。従って、-gaa①による派生動詞は、行為の働きかけの対象（出来事の受け手）を主語とし、その主語が出来事の影響を受けた状態、すなわち、「出来事（コト）の状態」を表わすと見做すことができよう。

3.2 1項動詞

1項動詞で-gaa①の付加が多く見られるのは、やはり状態変化を表わす動詞である。例えば、次の(15)では、*gasdlə* ‘open’という動詞に-gaa①が付加され、全体としてその動詞が表わす「開く」という出来事の結果を表わしており、単に「開いている」状態を表わす *gajuu* ‘be open’とは区別される¹³。

- (15) a. k'iwaayy gasdl-aa-ga.
the.door open-GAA-NPST
'The door has been opened.'
b. k'iwaayy gajuu-ga.
the.door be.open-NPST
'The door is open.'

次も同様に、状態変化を含意する動詞に-gaa①が付加されている例である。

- (16) kwaayjigigaay 'laaga gud=guy k'unxunəŋ-aa-ga.
the.skirt her RECIP=toward be.wrinkled-GAA-NPST
'Her skirt has become wrinkled up.'
- (17) sabəliigaay q'al?ud-aa-gən.
the.bread be.moldy-GAA-PST
'The bread had gotten moldy.'

(16), (17) の動詞に-gaa①がない場合は、やはりその時点の単なる状態を描写

¹³ これらの動詞は、*ga-*という類別接頭辞（ドアなどの平たい物体）とそれぞれ拘束語根の *sdlə, juu* からなるものである。いわば、これらの動詞語根がアスペクトの上で補充の関係にあるといえる。

する表現となる（下のいずれにおいてもそれぞれの動詞に非過去（NPST）を表わす接尾辞が直接付いている）。

- (16') kwaayjigigaay 'laaca gud=guy k'unxunəŋ-ga.
the.skirt her RECIP=toward be.wrinkled-NPST
'Her skirt is wrinkled.'

- (17') sabəliigaay q'al?wiida.
the.bread be.moldy[NPST]
'The bread is moldy.'

-gaa①が付加され得る1項動詞には、他に(18)のようなものがある。これらは、いずれも、その出来事に終結点があり（つまり telic）、もとの状態からの変化を含意する動詞であるといえる¹⁴。

- (18) *ciilgi* 'be ready,' *cah* 'sink,' CL-*guy* '(a classifier-type object) fall,' *k'ud?ul* 'die,'
k'uyiy 'dress up,' *sk'aljuu* 'boil,' *yaysdla* 'be cured' など。

一方、(19)のように、変化を含意せず、専ら状態を表わす（更に言えば、終結点のない atelic）動詞には -gaa①は付加されない。

- (19) *χaynaya* 'be alive,' *haana* 'be pretty,' *higa* 'be straight,' *skunχa* 'be clean,' *?is* 'be,' *q'əw* 'sit,' *gyaagan* 'stand' など。

しかし、状態を表わすとみられる動詞の中には -gaa①が付加されるものもある。例えば、

- (20) 'lə=quunəŋ-aa-ga.
3=be.crazy-GAA-NPST
'He is crazy.'

¹⁴ 0項動詞のうち、どのような動詞にこの -gaa①が付加されるのか、十分明らかにし得ていないが、Enrico (2005: 1174) には *tawxi* '(grease) drip' に -gaa①が付いた *tawxayaa* があげられている (Enrico 2005 は, *xi* という動詞語根をもとにした合成動詞とみている。尚、表記は本稿のものに改変した)。

(20) の *quunəŋ* ‘be crazy’ は、変化を含意しない状態動詞であり、次の例のように、-*gaa*①が付かない表現もある。

- (20') 'lə=quunəŋ-ga.
3=be.crazy-NPST
'He is crazy.'

Enrico (2003, 2005) は、これら両者の間には、「意志性 volitionality」の違いがあるとし、-*gaa*①が付加されることによって意志性が低くなると述べている。しかし、この *quunəŋ* ‘be crazy’ という動詞は、そもそも意志性がなく、実際、主語が1人称代名詞あるいは2人称単数代名詞である場合は、目的格が現われる(2.1及びHori 2008 参照)。エンリコの主張のように、この動詞に意志性を認めれば、他の同種の目的格の人称代名詞をとる動詞との整合性がとれず、一貫性を欠くことになってしまうので、この動詞だけに意志性を考えるのは妥当ではない。ただ、*quunəŋ* ‘be crazy’ には使役接頭辞 *giŋ-* を付加した *giŋ-quunəŋ* ‘fool, cheat’ という派生動詞があるが、この派生動詞は、-*gaa*①が付加された *quunəŋ-aa* からはつくれない(つまり、**giŋ-quunəŋ-aa* (CAUS-be.crazy-GAA)¹⁵)。他にもやはり状態を表わす *dalgid* ‘be pregnant’ に -*gaa*①が付加された *dalgid-aa* という例もあるが、それらの意味的な違いに関しては明らかにし得ていない¹⁶。

また、-*gaa*①は、状態変化を表わす接尾辞が付加された動詞には直接は付かない(下の(21b) 参照。言い換えれば(18)の動詞には状態変化を表わす接尾辞が付かない)。こういった動詞、更に(19)のような動詞に-*gaa*①が付加されるためには、それらの動詞に使役接尾辞 -*da*、あるいは、それに類する働きを持つ手段接頭辞で一旦状態変化を表わす動詞を派生する必要がある。すなわち、

¹⁵ 尚、影山(1996: 105)は、英語の「状態形容詞」の *crazy* は「静的な状態」を表わすのに対し、「完了形容詞」の *cracked* は「結果状態」を表わすと指摘している。ハイダ語において、-*gaa*①の有無によってこうした違いがあるのかについては、話者に確認する機会を得ていない。

¹⁶ Enrico (2003, 2005) は、*dalgid* ‘be pregnant’ に -*gaa*①が付加された場合も、同様に意志性が下がると説明しているが、十分な根拠があるとは思えない。この動詞も主語が1人称代名詞や2人称単数代名詞である場合は、やはり目的格が用いられる。他にも状態動詞に -*gaa*①が付加され得る例として *dacuŋ-aa* ‘come in handy’ (<*dacuŋ* ‘be near’)>などがある。この動詞は主語に有生物をとらないので、ここにあげた *quunəŋ* ‘be fool,’ *dalgid* ‘be pregnant’ とは異なり、エンリコの「意志性」は全く関与しない。その点においても、エンリコの解釈には問題がある。

- (21) a. naagaay *tlə-skunχaa-yaa-gən.*
 the.house by.hand-be.clean-GAA-PST
 ‘The house had been cleaned.’
- b. k’awaay *k’ā-ga-daa-yaa-gən.*
 the.herring.roes dry-become-CAUS-GAA-PST
 ‘The herring roes had been dried.’

(21a) の *skunχa* ‘be clean’ は、(19) で示したように、-*gaa*①が付加され得ない状態動詞であるが、それに手段接頭辞 *tlə-* ‘by hand’ を付加して状態変化を含意する 2 項動詞に転換し、更に -*gaa*①の付加によってその結果の状態を表わす動詞を派生している¹⁷。一方、(21b) では、*k’ā* ‘be dry’ という状態を表わす動詞に状態変化を表わす接尾辞 -*ga* ‘become’ と使役接尾辞 -*da* (上の例では -*gaa*①があるために形態音韻的な変容によって -*daa* となっている) で拡張された派生動詞に -*gaa*① が付加され、全体としてやはり結果の状態を表わしている (言うまでもなく、「乾いている」状態を表わすのであれば、*k’ā* ‘be dry’ だけでよい)。

更に、動作や運動、移動、出来事の発生を表わす動詞にも -*gaa*①は付加されない。例えば、

- (22) *k’ajuu* ‘sing,’ *qaayd* ‘leave,’ *χanjuu* ‘travel,’ *xyaal* ‘dance,’ *sdiil* ‘return,’ *tay* ‘lie,’ *qaa* ‘walk,’ *?is* ‘happen’ など。

これらはいずれも変化を表わさない動詞であることから、-*gaa*①が付加され得るのは、状態の変化を表わす動詞に限られるといえよう。

以上、述べてきたことから明らかのように、2 項動詞においては -*gaa*①の付加がヴォイスの転換に関わり、動詞がとり得る名詞項の数を減らすという統語的な現象的一面もあるのに対し、1 項動詞の場合は、たとえ -*gaa*①が付加されても、名詞項の数がかわらない点で統語的な現象ではない。むしろ、もとの動詞と -*gaa*①の付加によって派生された動詞との間には、「状態」と「結果の状態」というアスペクトに関する意味的な違いが生じる。それは、-*gaa*①の付加による統語的な現象はあくまでも付随的であり、むしろ、先に述べた「出来事 (コト) の状態化」という意味を派生するのがこの接尾辞の本質的な機能であ

¹⁷ この手段接頭辞は、「手で」という道具・手段を表わすのが本来の意味であるが、その意味から拡張されて、使役の接辞としても用いられることがある (詳しくは、堀 2011 参照)。

ることを示すものと解釈できるであろう。

4. *-gaa②*による派生動詞

次に、(2) に示した *-gaa②*について詳しくみる。この接尾辞は、名詞 (N) に付加され、1 項動詞を派生する¹⁸。その派生した動詞は、大きく分けて 1) 主語 (S) となる名詞句 (以下、単に「主語」とする) との同定性 (「S が N である」), 2) 主語の性質・属性 (「S が N の性質である／性質を持っている／性質を帶びている」), 3) 主語の種類 (「S が N の一種である／N のようなものである」), 4) 主語の存在位置 (「S が N にいる」) を表わす。それぞれの例は、次の通りである。

(23) 同定性

- a. Tom=gan 'lə=dawcan-aa-gən.
Tom=for 3=younger.brother-GAA-PST
'He was Tom's younger brother.' (lit. 'He was a younger brother for Tom.')
- b. huyaad='uu dii 'laana+?awca-yaa.
now=FOC 1SG.OBJ town.chief-GAA
'Now I am a town chief.'

(24) 性質

- a. dəŋ='uu dagu-yaa+?iŋ?an-ga.
2SG.OBJ=FOC strength-GAA+very-NPST
'You are very strong.'
- b. nəŋ scaa-gaa-s 'laa qij-aa-s.
INDEF shamanic.power-GAA-NPST 3 see-EVD-NPST
'He looked at the shaman (= the one who had a shamanic power).' (Swanton 1905: 39)
- c. 'lə=stlaay gaw-aa-ga.
3=hand hair-GAA-NPST
'His hand is hairy.'

¹⁸ 名詞以外に副詞 (*?aaχan* 'closely' > *?aaχan-aa* 'be close to') や单数の有生物の範疇を表わす類別接頭辞 *dla-* に付く (*dlaa-gaa* 'be tall') こともあるが、いずれも語彙化しており、例も限られている。

- d. ciχwaay taaj-**aa**-ga.
 the.beach sand-GAA-NPST
 ‘The beach is sandy.’

(25) 種類

- a. caal-**gaa**-giil-s=gyaan=’uu ...
 night-GAA-become-NPST=when=FOC
 ‘When it got dark, ...’
- b. gyaan=haw q’ada nəŋ gwaay-**aa**=gu qayd sdij giχaaŋ-aa=ga
 and.then offshore INDF island-GAA=at tree two stand-EVD=to
 ’laa tl’ə=q’ay-sdlə-scaa-yaa-qən.
 3 3PL=CL-TAKE-to.centre-EVD-PST
 ‘Then they took him to two trees that stood on an island (= something that
 was a kind of island) lying out at sea.’ (Swanton 1905: 45)

(26) 存在位置

- nəŋ sq’iiw-**aa**-gaa-s qyaanŋ-ca-t’al-s-ii.
 INDF bow-GAA-EVD-NPST see-go.on.foot-downward-NPST-INFO
 ‘The one in the bow got off to look.’ (Swanton 1905: 39)

上にあげた例から分かるように、主語となる名詞句は、必ずしも有生物であるわけではなく、無生物であることもある。また、最後の「存在位置」は、おそらくカヌーやボートといった乗り物を表わす名詞に限られる。

この -*gaa*②は、生産性が高く、他言語からの借用語にも付加され得る。次の(27a)は、近隣で話されるトリンギット語 Tlingit (ナ・デネ語族) から、他は英語から借用された語にこの接尾辞が付加されている例である¹⁹。

¹⁹ (27a) の *q’aya sgiday* に関して、Enrico (2005: 1503) は、元々のトリンギット語の状態動詞 ‘be poor’ にここでいう -*gaa*① (Enrico 2005 は ‘participle suffix’ と称する) が付加されたとみているが、動詞を動詞として借用し、それに -*gaa*①を付加して「ハイダ語化」したとみるよりも、むしろ他の借用形式と同様、-*gaa*②を付けてハイダ語として取り入れたとみる方が自然である。

- (27) a. *χa qyaarŋ-ga q’anya sgidaay-gaa-s lə=qinŋ-gən.*
 dog looking-ATTR be.very.poor-GAA-NPST I=see-PST
 ‘I saw the poor-looking dog (= the dog whose looking was very poor).’
 (*q’anya sgidaay* < Tlingit *q’anaʃgidei* ‘be poor’ [Enrico 2005: 1503])
- b. *dii=’uu gəm greedy-gaa-gəŋ-ga.*
 1SG.OBJ=FOC NEG greedy-GAA-NEG-NPST
 ‘I am not greedy.’ (<*greedy* [Eng.])
- c. *nəŋ doctor-gaa-s ’lə=tłə-njaysdlə-qən.*
 INDEF doctor-GAA-NPST 3=by.hand-be.cured-PST
 ‘The doctor (= the one who was a doctor) cured him.’ (<*doctor* [Eng.])

-*gaa*②による派生動詞は、上にあげたように、「同定性」「性質」「種類」「存在位置」など、付加される名詞に応じて様々な意味を表わすとみられるが、共通しているのは、いずれも1項動詞であり、動作ではなく状態を表わす、言い換えれば、[-agency, -control] と特徴付けられるという点である。実際、(27a) や (27b) のそれぞれの主語に現われている2人称単数、1人称単数代名詞は、いずれも目的格 objective (OBJ) が用いられていることからもそのことが窺える²⁰。いずれも事物を表わす名詞に付き、状態動詞を派生していることから、この -*gaa* ②は、「事物（モノ）の状態化」を表わす動詞を派生するのがその機能であるといえよう。

5. 結論

3節では -*gaa*①の機能を「出来事（コト）の状態化」、-*gaa*②のそれを「事物（モノ）の状態化」として、それぞれ別個の接尾辞として扱ってきたが、やはりいずれも「状態化」という点で共通する。尤も、両者を子細にみれば、①の方は、状態そのものよりもその出来事によって生じた結果に焦点を当てているのに対し、②の方は、状態そのものを表わすという点で違いがあるが、①は変化を含意する動詞に付加され、一方、②は名詞に付加されるわけであるから、そのような差異が生じるのは、それらの接尾辞それ自体にあるのではなく、それ

²⁰ しかし、建物を表わす名詞（例：*church, school, home* など）にこの接尾辞が付いた場合、派生動詞全体の意味は、「Nに出席する／Nに行く」などとなり、その主語となる人称代名詞は、目的格ではなく動作格が用いられる。例えば、

lə=home-gaa-gən. (1SG.AG=home-GAA-PST) ‘I went home.’

らが付加される語根の語類に起因するものと考えられる。いずれの場合においても、その派生動詞を述語とする文あるいは節において、主語がその表わされる事柄に何ら関与するものではないという点は共通しているといえよう。それは、①と②による派生動詞がいずれも [-agency, -control] という意味特徴で示される点にも現われている。

ところで、ハイダ語には、やはり名詞に付いて動詞を派生する *-da* という接尾辞がある。例えば、

(28) *-da* による派生動詞

gaal-da (night-VBLZ) ‘stay overnight,’ *giʔəlgaləŋ-da* (story-VBLZ) ‘tell a story,’ *gagən-da* (breath-VBLZ) ‘breathe,’ *phone-da* (phone-VBLZ) ‘make a phone call’ など。

派生動詞の意味は、もとの名詞から推測できるものもあるものの、かなり語彙化しているが、いずれもその行為者がその事態を引き起こし、また制御することができるという動作を表わすことから、 [+agency, +control] という意味特徴を有する。実際、主語が 1 人称代名詞あるいは 2 人称単数代名詞である場合は、動作格が用いられるので、(3a) の Sa 動詞に分類される。その点において *-gaa* ②による派生動詞とは対極にあるといえる。

この関連で、この接尾辞と同じ形式で、動詞に付く使役接尾辞 *-da* がある点を指摘しておく必要があろう。この接尾辞は、(29) に示すように、1 項動詞に付き、行為者(=使役者)となる名詞句を 1 つ加える働きをもつ(堀 2012 参照)。

- (29) *sk'åljuu-da* ‘boil NP,’ *k'in-da* ‘warm NP,’ *gu-da* ‘burn NP,’ CL-*guy-da* ‘drop a classifier-type NP’ (< a classifier-type NP fall), *sdiil* ‘return NP,’ *χanjuu-da* ‘send NP,’ (< travel), *qat-da* ‘freeze NP,’ etc.

この接尾辞は、動詞がとり得る名詞項の数を増やすという点で、やはり上で述べた *-gaa* ①と対極にあるといえる。

ここで取り上げた *-gaa*① と *-gaa*②をそれぞれ使役接尾辞 *-da* (CAUS) と動詞化接尾辞 *-da* (VBLZ) と対峙させて考えるならば、おおよそ次のような関係が認められるであろう²¹。

(30) *-gaa*①, *-gaa*②と *-da* (CAUS), *-da* (VBLZ)

<i>-gaa</i> ①	——	<i>-da</i> (CAUS)	ヴォイス
<i>-gaa</i> ②	——	<i>-da</i> (VBLZ)	動詞化
[−agency, −control]		[+agency, +control]	

ハイダ語は、いわゆる活格タイプ的な特徴を有する (クリモフ 1977 [1999] など)。その特徴は、(3) に示したように、いわゆる自動詞がその主語に他動詞主語と同じ格の人称代名詞をとるものと他動詞目的語と同じ格のそれをとるものに分かれる点に顕現する (詳細は Hori 2008 参照)。ここにみた派生動詞も [agency] と [control] という意味特徴で対立することを支えているのは、やはり、ハイダ語の活格言語的な性質によるものと思われるが、それが活格言語を特徴付けるものなのかどうかは、同種の言語を広くみた上で考える必要がある。

略号

AG: agentive, CAUS: causative, CL: classifier, EVD: evidential, FOC: focus, INFO: information, INSTR: instrumental, NEG: negative, NPST: nonpast, OBJ: objective, PL: plural, PST: past, RECIP: reciprocal, SG: singular, VBLZ: verbalizer; = clitic, - affix, + compound.

参考文献

- Enrico, John (2003) *Haida syntax*. Lincoln: The University of Nebraska Press.
 Enrico, John (2005) *Haida dictionary: Skidegate, Masset, and Alaskan dialects*. Fairbanks/Juneau: Alaska Native Language Center and Sealaska Heritage Institute.

²¹ *-gaa*①を「ヴォイス」で括るのは上に述べたことと矛盾するが、*-da* (CAUS) と対置するためにここではこのようにしておく。

- Geniušienė, Emma (1987) *The typology of reflexives*. (Empirical Approaches to Language Typology 2) Berlin: Mouton de Gruyter.
- Haspelmath, Martin (1990) The grammaticalization of passive morphology. *Studies in Language* 14 (1): 25–72.
- Haspelmath, Martin (1993) Passive participles across languages. In: Fox, Barbara and Paul Hopper (eds.), *Voice: Function and form*: 151–177. Amsterdam: John Benjamins.
- 堀 博文 (2001)「ハイダ語（北米インディアン諸語）の声調について」,『音声研究』第5巻第1号 : 28–36 (日本音声学会)
- 堀 博文 (2011)「ハイダ語の手段接頭辞について」, 北方言語ネットワーク (編)『北方言語研究』第1号 : 1–22 (北海道大学大学院文学研究科)
- 堀 博文 (2012)「ハイダ語の使役について」, 北方言語ネットワーク (編)『北方言語研究』第2号 : 91–114 (北海道大学大学院文学研究科)
- 堀 博文 (2017)「ハイダ語の類別接頭辞と名詞類別」,『人文論集』第67-2号 : 159–185 (静岡大学人文社会科学部)
- Hori, Hirofumi (2008) Semantic motivations for split intransitivity in Haida. 『言語研究』第134号 : 23–55 (日本言語学会)
- 影山太郎 (1996)『動詞意味論—言語と認知の接点—』くろしお出版
- Kemmer, Suzanne (1993) *The middle voice*. (Typological Studies in Language 23) Amsterdam: John Benjamins.
- Kittilä, Seppo (2011) Transitivity typology. In: Jae Jung Song (ed.), *The Oxford handbook of linguistic typology*: 346–367. Oxford University Press.
- クリモフ, G. A.／石田修一 (訳) (1977 [1999])『新しい言語類型学 活格構造言語とは何か』三省堂
- Nichols, Johanna, David A. Peterson, and Jonathan Barnes (2004) Transitivizing and detransitivizing languages. *Linguistic Typology* 8: 149–211. Berlin: Walter de Gruyter.
- Swanton, John R. (1905) *Haida texts and myths: Skidegate dialect*. Bureau of American Ethnology, Bulletin 29. Washington, D. C.: Government Printing Office.

* ハイダ語のデータを提供してくださった話者は次の方々である（イニシャルと生（没）年、男女〔m/f〕の別のみ記す）。

JC (1924–2018, f), GC (1911–2001, m), NP (1926–2012, m), WP (1905–2007, m), ER (1921–2010, f), GV (1938–, f), EW (1913–2009, m), JW (1921–2008, m) , AY (1924–2002, f)

Dii gi tllgiidan sgawdagi dallng ga hll kil'laaga. Haw'a!

* 本稿は日本学術振興会科学研究費（基盤研究（C））「ハイダ語の形態統語法と構造的变化に関する総合的研究」（研究代表者：堀 博文、課題番号：K1602663）による研究成果の一部である。

(Abstract)

The verbal suffix -gaa in Haida

HIROFUMI HORI

The present study discusses the uses and functions of two suffixes that share the form *-gaa*, hereafter designated *-gaa* (1) and *-gaa* (2), in Haida, a language isolate spoken on Haida Gwaii off the northwest coast of British Columbia, Canada. It can be concluded that both suffixes function as stativizers.

-gaa (1) is a verbal suffix that is attached to a two-argument verb denoting an event the agent instigates and controls where the patient is affected (e.g., ‘make,’ ‘break’), and to a one-argument verb that implies a change of state (e.g., ‘wrinkle,’ ‘boil’). Because the derived verb refers to the resultant state, the suffix functions as a stativizer of events, in contrast with a simple state such as ‘be alive,’ ‘be straight.’

-gaa (2), on the other hand, is attached to a noun to derive a verb that means ‘be N,’ ‘be a type/kind of N,’ ‘have a property of N.’ Thus the suffix can be regarded as a stativizer of things.

Verbs that are derived by the two suffixes can be characterized as [−agentive, −control] in that they denote an event the subject does not perform or control; this is shown by the fact the verb requires first- and second-person pronouns to be in objective case when they occur as the subject. Thus the derived verb contrasts with one derived by the verbal suffix *-da* (hereafter *-da* (1)) or the verbalizing suffix *-da* (hereafter *-da* (2)); the former is a causative suffix, adding a causer to a one-argument verb, while the latter derives factitive verbs denoting an action that relates to the noun it attaches to. These two suffixes yield verbs that can be characterized as [+agentive, +control].

Haida is claimed to be an active-type language that marks intransitive subjects two different ways: as transitive subjects for verbs of [+agentive, +control] and as transitive objects for verbs of [−agentive, −control]. Such a dichotomy of intransitives might underlie derivational processes involved with the four suffixes *-gaa* (1), *-gaa* (2), *-da* (1), and *-da* (2), thus conforming to a propensity of Haida to be an active-type language.